津波避難キャスターコメント作成に関する考察
―非報道従事者対象のワークショップから―

○福本晋悟[1]・近藤誠司[2]

[1]株式会社毎日放送　総合編成局アナウンスセンター（人と防災未来センター特別研究調査員）
[2]関西大学准教授　　社会安全学部安全マネジメント学科

１．本研究の背景と目的

東日本大震災発生時、各放送局は災害初動特別番組を迅速に開始し、津波からの避難を呼びかけた。しかし住民に避難を充分に“後押し”することができなかった課題を踏まえ、各放送局は放送手法の検討・改善を行っている。その1つで、キャスターが住民に対して呼びかける文言や例文である「津波避難キャスターコメント」も検討・改善が行われた。

既に新たなキャスターコメントは、東日本大震災以後の津波警報発表時の災害初動特別番組に登場している。一例として2012年の発表時には、NHKは、「東日本大震災を思い出して下さい」、「命を守るために一刻も早く逃げて下さい」、「まわりの人にも避難を呼びかけながら、どうぞ逃げて下さい」と呼びかけた。また、TBSテレビは、「東日本大震災を思い出して下さい」や「沿岸部や海岸にいる人はただちに高台または避難ビルに指定された建物など安全な場所に避難して下さい」などのキャスターコメントを用いて避難を呼びかけた（福長 2013）。

また、横尾・矢守（2017）は、インパクトのある表現（強い口調・キーフレーズ）や教訓（リアルな事例）などを盛り込んだコメントの検討を提起している。さらに、横尾ら（2017）は、海岸付近に設置の情報カメラ映像を放送する際に使用するキャスターコメントを作成するにあたり、住民へのヒアリングを実施した。

しかしながら、キャスターコメントの検討・改善の議論は、場合によっては学識関係者の監修はあるものの放送局内での議論に留まっているため、避難呼びかけの「受け手」である住民の意見が反映されることは稀である。そこで、本研究では、津波避難キャスターコメントを非報道従事者が考案するワークショップを実施し、どのような内容に着目し、アイデアを示すかを調べた。

２．対象と方法

対象は、関西大学社会安全学部で「災害ジャーナリズム論」を受講している大学生で、2018年11月28日の講義内で実施した。調査会場は、講義教室である。

まず、津波避難を呼びかける方法について回答する自由記述のワークシートを配布した。ワークシート提出後には、アンケート用紙を配布した。設問1は、「『津波避難の呼びかけ方』を考えてみたことによって、あなたはアナウンサーなどによるアナウンスコメントに対して、関心が高まりましたか？」である。設問2は、「『津波避難の呼びかけ方』を考えてみたことによって、今後、実際に呼びかけられた時、以前よりもしっかりアナウンスコメントを受け止めることができると思いますか？」である。両設問ともに、選択肢は「強くそう思う」、「そう思う」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」とした。

３．結果

（１）津波避難ワークシート調査

284人がワークシートを提出した。単語やフレーズごとに質的分析を行ったところ、既に放送現場で使用されているものは少なくはなかったが、その中でも放送現場では使用されていない新たな提案として、245のキャスターコメント（**表-1**）と、49のアイデアが見出された。

表-1　キャスターコメントに関する新たな提案

キャスターコメント	出現回数
あなた	26
命が（を）（最）優先	23
生き残る	20
「自分の命」、「死」	18
生きる／生きて	13
「自分の命は自分で」	12
大切な人／家族など	11
「後悔」、「助かる／助かり」	8
生死を分ける	7
「大切な命」、「生き延びる」	6
考（考えるより／何も考えずに）	5
あなたに行動が（で）	4
「『私は大丈夫』ではなく」、「一歩」、「とりあえず」	3
「恥ずかしがらず」、「勇気を」、「1秒」「人生を終わらせてはいけません」、「諦めないでください」、「飲み込まれる」	2
その他	39
計	245

キャスターコメントとしては、「あなた」が最多の 26 回出現した。例えば、「まずあなたが逃げてください」や「あなたが逃げるのです」などである。「あなた」という言葉で「避難すべき主体」を強調すれば効果的ではないかといった指摘は、報道現場においてすぐにでも活用できそうである。なお、26 という出現回数の判断は容易ではないが、参考として、東日本大震災以後に使用される機会が増えた「命を守る」も 26 回だった。次いで、「命が（を）（最）優先」は 23 回で、「命が最優先です」や「まず命を優先してください」などが記入されていた。

一方で、回答の中には，端的に「死（ぬ）」という言葉遣いが提案されるなど、そのままのかたちで放送に実用することは難しいアイデアも見受けられた。

一方、ワークシートには 49 のアイデアも寄せられた。危機感を与えるために「警報音やサイレンなどを使用すること」が最も多く 18 人が提案した。続いて多かったのは、12 人が書いた「キャスターコメントは短文や短いフレーズで」という指摘だった。

次いで、8 人が、番組に出演しているキャスター自身も避難すると宣告して住民に避難を促すことを提案した。具体的には、「私も今から避難するので、テレビを見ているみなさんも避難してください」や「これから私たちもビルの屋上に避難します」と、キャスターが平時の放送とは異なる対応をアナウンスすることである [1]。

（2）ワークショップ調査後のアンケート調査

アンケートには、234 人が回答した。「強くそう思う」の割合が、設問 1 では 35%（図-1）、設問 2 では 39%（図-2）となり、少なくとも 3 人に 1 人は明確にプラスの効果を持ち得た可能性がある。

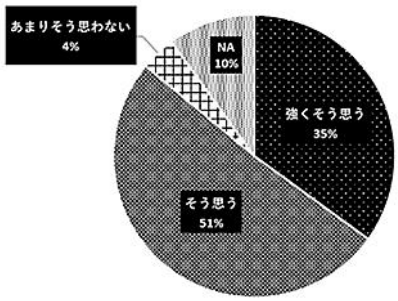

図-1　設問 1 に対する回答

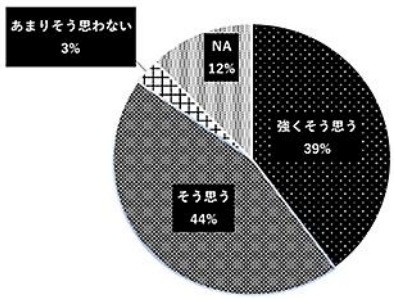

図-2　設問 2 に対する回答

4．考察と今後の課題

調査対象の大学生から提起されたキャスターコメントやアイデアは、荒唐無稽なものばかりではなく、既に専門家が指摘したことも含まれていた。報道現場の中で視野狭窄に陥ることを防ぎ、より建設的な意見を広く集めるためにも、このように非報道従事者にアイデアを募ることが重要ではないだろうか。

また、アンケート調査では、ワークショップを通じて津波避難キャスターコメントに対する「関心度」と「今後の情報感受性」が高まったという傾向が見受けられた。この結果は、非報道従事者が情報受信者として単に津波避難呼びかけの議論を受動的に受け止め、評価するだけでなく、報道従事者／情報発信者サイドの活動を経験してみることが、ひるがえって災害情報受信時の感受性を高めることを示唆している。本調査の対象は防災を学ぶ大学生であり一般的な回答傾向と異なる可能性はあるが、そうであれば、今後も様々な対象とこのようなワークショップを重ねていくことでリスク・コミュニケーションを賦活しておけば、災害発生時にキャスターコメントへの住民の感受性を高め、クライシスマネジメントが奏功する可能性が望めるのではないだろうか。

謝辞：調査にご協力いただきました関西大学社会安全学部「災害ジャーナリズム論」受講生の皆様にこの場を借りて改めて御礼申し上げます。

補注

1) これについては、金井・片田（2011）の研究が参考になる。仮想条件下の 6 つの質問を行ったところ、「テレビなど見ていないで、すぐに避難してください」というアナウンサーのコメントが放送された場合に「必ず避難したと思う」と回答したのは、6 問中最も高くなった。金井・片田は、これらの対応はあくまで“秘密兵器”で、「今が緊急事態である」という雰囲気（Atmosphere）をつくり、住民に「いつもとは違う」と思わせる可能性があるとしている。

参照文献

金井昌信・片田敏孝（2011），津波襲来時の住民避難を誘発する社会対応の検討―2010 年チリ地震津波の避難実態から―，災害情報，9，103-113.

福長秀彦（2013），津波警報・NHK が強い口調で避難呼びかけ，（参照年月日：2021.10.25）
https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/research/focus/545.html

横尾泰輔・大窪愛・佐竹祐人・早坂隆信・吉田一貴・里匠・岩田孝仁・田中淳（2017），ロボカメを活用した津波避難呼びかけ表現の検討：NHK 静岡放送局の研究活動報告，日本災害情報学会第 19 回学会大会予稿集，14-15.

横尾泰輔・矢守克也（2017），東日本大震災の初動報道に関する当事者分析：キャスター自身による分析・調査と実践的考察，災害情報，15，149-159.